
~ 楽譜 ~ 私の異世界探検ライフ

黒椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～楽譜～私の異世界探検ライフ

【EZコード】

N5407X

【作者名】

黒椿

【あらすじ】

大雑把な主人公と、やる気のない精霊とが繰り広げるほのぼの（！？）ファンタジー。 魔法につられた主人公が精霊界を救うべく、精霊と『樂譜』を集めてまわります。 そのなかで起こる様々な出来事を突破し、主人公を待ち受けているものは…。

作品の中で疑問に思った事はどんどん聞いてくださいね

作中で疑問にお答えいたします！（・・・）キリ

答えられる範囲ですが（・・・）

感想・ご意見お待ちしております！

こんなお話も読んでみたい！などの意見もお待ちしております！

その場合、本編にどうにかしてねじ込むか番外編でお届けいたします！

登場人物紹介

麗舞 れいぶ
桜花 おうか

性別 女
所見 小さい頃に母親を亡くし 一人暮らし。
中学一年生 成績は何だかんだ言って中の上死ぬほどを食事を愛している。（食事を邪魔されるとキレます）
現実的で、常に損得勘定が働く。そのわりに意外と魔法とかを夢みていたりする。

ソフィア・アイメーレジー

性別 女

所見 目上の人には猫をかぶり絶対的に危険なことがない限り自分から動かない。

穏やかにも見えるが、案外強行突破したりする変わり者。

マリア・レイストクレアティ（レイクトクレアティ国の女王様）

性別 女

所見 時たま出てくる精霊界でもっとも偉い方。
優しいけど変わったものが好きで真面目。

乙姫様

性別 女

所見 楽譜の守護者 しかし楽譜の膨大な魔力にあてられて狂つている所を主人公達に助けられる。

第1話

……………、エリなんだ奴!

私は、全く見覚えの無い場所に座っていた

えーと、何がどうなつてこうなつたのか、思いかえしてみよう
たしか、学校から帰つてて、友達がなんか急に怒りだした原因を考
えてて、出てこないから、両手を組んでうなつてたんだ！！

そうだそだで、なんか足元に地面の感覚なくなつたなと思つた瞬
間落ちたんだ！

で、目を開いたらここにいたと、だからか、なんかお尻痛いなと思
つたら落ちた時に尻餅ついたんだな…

だれだよ！あんなところに落とし穴掘つたのは…！

おかげでこつちは尻餅ついたんだぞ！…！

まあ、いもしない相手に怒つてもしかたないか…

にしても、見渡す限り森、森、森だな～

つっても私の周りは草原だけどそう、私の周りだ・け！

私がいるところだけ草ぼーぼー

だれだよ、掃除さぼったの！

それともなに？新手の嫌がらせ？

「この森、燃やしてしまおうかしら…」

私はいい加減切れて、ものすくべ物騒な事を言い出した

第2話

すると、突如上から声がした

『あ、すいません急に上から私は精霊のソフィアと申します。つてこんな事言つてる場合じゃない森を燃やすなんて止めてくださいよおおー!』

は?、こいつ何言つてんの?私は思つたが口には出せなかつた。

「ああ、あの事、あんた何言つてんの?あんなの嘘に決まつてんじやん」

こいつ本物のバカか天然かどつちなんだ

『なんて物騒な嘘を・・・もうそんな事言わないでくださいよ』

こいつ、ウザい。さすがに口には出さないが、いや出しちつになつたがな

「はいはい、もう言こませんよおー」

適当に答えた。

『はいは一回ですーー。』

マジウザい、こいつ母親がなんか?もちろん、口には出れない。出しそうになつたけど.....ぐつジョブー私、忍耐の子ーー

「はい、わかりましたーーこれでいいでしょ?」

「う~ん、まあ良いですよ」

「セーフィやあんた誰?何者?」

『私はあなたの世界の言葉で言つといわば精霊・妖精の類いです私の名前はソフィア・アイメーレジーです。ソフィアとお呼びください』

「私は麗舞 桜花、桜花でいいよ」

『よひしへお願ひします。桜花さん』

「急だけど、ソフィアは髪と瞳は赤だけビ、全体的に縁だから木の妖精とかだつたりするの?」

『あ、いえ、私は炎の属ですんで炎の妖精です。』

私は内心

(炎属性な癖に燃やすなとか言つのか…)

と思いつつも

「えー!炎ー!服とか靴縁なのにー!?

と、驚いてみたりした。

『はい、私赤より緑の方が好きなんで縁にしてるだけなんですよ。髪と瞳は親族に全体に変えるなと言われているので、どうする事もできません…』

ソフィアは肩をすくめてそう言った

「全部を属性に合わせなくていいの？」

『はい、水の妖精が赤い服着たり、髪にしたり瞳にしたり、雷の妖精が黄色い服着たり髪にしたり瞳にしたり、みんな思い思い好きなようにしてますよ。』

「思つていたより妖精つて軽！…」

私達（おもに私が）はそこで自分達の事について話していた。するとソフィアが急に思い出したかのように私に向かって喋り出した

『突然ですが、桜花さんにお願いがあるのですが、良かつたら聞いてくださいませんか！？』

「いいよ」

私は気軽にそう発言した事を後々後悔したり喜んだりすることになりました。

第3話

「で、何？その頼みつて」

『じつは、私達の世界には伝説の楽譜という物が在るんです。しかし、その楽譜は今、3つの世界に散らばつてゐるつていうか、預ける状態なんです。今私達の世界は地盤が崩れ、壊れかけています。しかも悪魔もそれをいい事にこの世界を乗っ取ろうとしているのです。それを直す事が出来るのが、伝説の楽譜なんです。伝説の楽譜があればこの世界は治るし悪魔もきっと諦めてくれるはずです。だから伝説の楽譜探し手伝つてください…』

自分からこいつて言つとこで悪いが面倒くさいやうな為、断らせていただこう。

『「い」めんなさい、自分から言つといてなんですが、面倒くさそうなので、断らせていただきます。』

『そんなん…』

『てゆづかさ、預けてるんなら返してもうえばこいじゃない。』

『私達みたいなただの妖精や精霊が行つても相手にしてもらえません』

『じゃあ、女王様が行けばいいじゃん』

『女王様は今、忙しくて城を動く訳にはいきません。それに楽譜の力に狂わされてしまった人もいます。そんな所に女王様をお連れす

るなんて…』

(じゃあ、 私なら別にいいのかよ)

「それこそ、 仮に私がそれを手伝ったとして、 私に何の利益があるの？」

『そんなつま願いです！ 手伝ってください…』

『ねえ、 私の話聞いてる？だから、 仮に私が手伝ったとして、 私になんの利益があるの？ って聞いてるのーそれに、 私じゃなくとも他の人でいいじゃない。』

『それは、 普通、 この世界に人間は入れないようになっています。しかし、 あなたは入ってきた。 それは、 あなたにはなにか特別な力があるという事なのです。 それに、 この世界にある言い伝えがあるのです。』

(入ってきたていうより落ちた方が正しいけどね。 けど、 言い伝えの内容が気になるから聞いてみよう…)

『言いく伝え？』

『はい、 それは、

この世界が壊れかけた時、 救いの女神がこの地を救いに異世界から舞い降りるだろ？』

とこう言いく伝えがあるのです。』

『救いの、 女神…』

『きつとあなたがそうなのです。現に、何千年前に救いの女神が現れ、世界を救ってくれました。まあ、あなたの世界と私達の世界じゃ時間の流れが大きく違うのですがね。』

「私にも出来るのかな？」

『きっと、あなたにならば出来ます。いいえあなたにしか出来ないのです。

それに、魔法使いになれますよ？』

魔法使い・・・

「えっ、本当…？じやなくて、『ゴホンッ
ま、まあ？そんなに私が必要なら手伝ってあげなくもないけど？』」

私は内心、魔法使いといつ言葉に心の奥底からウキウキしていた。

『ありがとうございます…恩にきますー』の、一生忘れません！』

「そんな大げさな…」

私はそんな大げさな…と言つたがそれがどれだけこの世界にとつてありがたいことなのか知るよしもなかつた。

—SHIDEソフイア—

私はいまさつき女王様から呼び出された。

女王様もこのいそがしい時にどうしたんだろう。

この世界は最近、壊れかけている。

この世界の地盤にヒビが入り、それだけでも大変だといつに、そのヒビから悪魔がこの世界に入りこんできた。

この世界は大きく分けて2つ、1つは、私達が住んでいる精霊界、もう一つは悪魔達が住んでいる悪魔界、決して交わる事の無い世界が交つてしまつた。

しかも、悪魔が所々で問題を起こしているのだ。

しかし、いくら大変だとはいえ、侍女の私が呼び出されるとは、この世界も末期だな。

とか思いながら歩いていると王の間についた。私はコンコンコンッと軽く扉を3回ノックしたあと、

『ソフィアです。』

と詰ひ。すると中から

『 Bieber』

と優しい感じな声がした。

扉を開ける

この部屋の一一番奥にある玉座に座っている人がこの国、レイストクレアティ国 の 頂点に立つ御方だ。

『おまたせいたしました。マリア様私になにようで御座いますか?』

『この国が壊れかけていることは知っていますね。』

『はい。』

『ついに現れたのです。』

『現れた、とは?』

『救いの女神が、この国の救世主がです!!!』

女王様が目を輝かせて言つ。

『それは、本当にどうぞますかー?』

『はい、今さつき森に現れたようです』

『しかし、何故それを私に?』

『あなたに行つて貰いたいのです。楽譜集めに。あなたにはそれなりの力があるし、きっとやり遂げてくれると信じています。』

『…私で、宜しいのですか?』

『あなたにしか出来ないです。
お願ひできますか?』

『はい。』

『あ、それと、その子に会つたら、私の所に連れてきてくださいね
会つてみたいんで。』

『かしらまつました、行つて参りますーー。』

『怪我のないようになれ。』

私は礼をし、その部屋から出て行つた。

『とつあえず、当分の間猫かぶるか…』

私は小さこ声でそう呟いた。

とつあえず、森に行くかな。
救いの女神様に会い。』

『よし、転送』

森に着いた瞬間、声が聞こえた。

「この森、燃やしてしまおうかしり…」

『あ、すいません急に上から、私は精霊のソフィアと申します。つてこんな事言つてゐる場合じゃない森を燃やすなんて止めてくださいよおおおーー』

これが私達の出会い方。

第4話

『それじゃ、行きますか。』

「え、ど！」

私が言いかけたその瞬間、私は宙にいた、周りの景色は変わっていた。

ビセツ

「痛つた～、つてこ～」

気が付けばそこは森ではなく、とても豪華な場所だった。

目の前にはまばゆいばかりの光を放つ金色の髪を上方で緩く結い上げ、サファイアのような綺麗な色の瞳に、青色と銀色を使った服を着た女人がいた。

『ここは王室でござります。こちらに居られる方は、この国の頂点に立つおかた、女王陛下様であられます。』

「えつ、女王様！？」は、初めてまして！地球の日本という所から来た、麗舞 桜花とあります。宜しくお願ひします！』

『あなたが桜花ですね！？会うのを心から楽しみにしてました！！私の名前はマリア・レイストクレアティです！マリアって呼んでください！』

（女王様明るい、でも超美人、めっちゃ綺麗～）

「あ、えと、宜しくお願ひしますー!マコア様ー!」

『マコア様はキャーキャーとはしゃいでいるのでスルーしてこによね?』

『やだ、ソフィア今さつきのなんなの?』

『ああ、あれは瞬間移動ですよ。』

「ふ〜ん……って、瞬間移動!? 今瞬間移動って言ったよね、マジ!
!?」

あまつこもせりうつと書つもんだからそのままスルーする所だった…

『はい、本当にますよ。お疑いになるのなう!自分の頬をつ
ねついて!』
『

さあ、

「痛いー!本当なんだー夢じゃないんだー!」
「

私はとにかくはしゃいだ。魔法は昔から私の憧れなのだ。

「私にも出来るー!」

『はい、出来ますよ。瞬間移動は修業がいるので出来ませんが、他の
魔法なら契約をしたらできますよ。』

「そんだけー?じゃあやるー!すぐやるー!..』

『それでは、こちらの紙に』自分のお顔前をお書きください』

かきかわ

『書きましたね？では、女王様！』

何が起こるのだろう

：少し不安だなー

『では、私の力を少しですが、あなたに分け与えましょう。』

目の前に黄色い光を放つ球体型の物が現れた。

『さあ、受け取りなさい』

私がそつと触れるとそれは黄色の光を放った。あまりにもすごい光のため、私は目をつぶってしまった。

そつと目を開けるとその球体は消えていた。

「あれ？あの球体型は？それよりなんか、体にすごい力が宿つた気がする！」

あくまでも？感じ だが。

『これであなたも魔法が使えますよ』

『えつ本当！？これで念願の魔法使いだ！？！子供の頃からの夢だつたんだよね！？！』

「ねえ、マリア様、そういうえば魔力？を渡すの少しつて言ってたけどなんですか？」

『私はこの国の唯一の支え、全ての力をかす訳にはいかないのですよ、はじめんなさいね。』

「ま、そうだよね、普通、少しでも力を分けてもらつた事を感謝しながらつちやなぐくつちやな」

『分かつて頂けましたか？にしても、とても嬉しそうですね、では！これから私と一緒に楽譜集めがんばりましょう！』

「まあ、力も貰つちゃつたし、頑張るしかないか、これからよろしくね！ソフィア…あああ！？」

瞬間、私の体は宙に消え瞬く間に景色は別の物と化していた。

『一刻の猶予も惜しいのですー！あ、じつはうへーー。』

私、本当に頑張れるだろうか……

二人の旅はまだ始まつたばかり、これからまだまだ続きます。

頑張れ！桜花、ソフィア！

第5話

そこは見渡す限りの海だった。

いや、光が屈折して見えるから 恐らく海の中だ息が出来るといつことは自分が魔法を使えている証拠だろうか…

まあ、魔法使えてなかつたら私、今頃溺れてるんだろうけどね…

私、泳げないから…

私の頭にふと疑問がよぎった。

「さうだ、ねえ、伝説の楽譜ってのは何処にあるの?」

『やうですね、多分、竜宮城ですかね』

「そつかー竜宮城かー…って竜宮城!…マジドー!…あるのー…竜宮城!…」

『はい、ありますよ。』

「でもさ、もし帰る時に玉手箱渡されてお婆ちゃんになつたひどつしみつ…。」

私の中では竜宮城=玉手箱=じこわん(ばあさん)になつてゐる。

『いや、私達が貰つるのは楽譜ですし、それに、玉手箱貰つたら開けなければいいだけじゃないですか』

「そっか、そういうやうだよな、じゃあ、いつか早く楽譜探しに行
い」

『マイペースですね……まあいいです、そりですね、それじゃあひま
は竜宮城です！』

「ひして私達の旅は始まった

第6話

ほのかに感じる冷たい水に包まれながら、ビームでも続く広い海のなかを泳いでいた。

いや、新幹線のように猛スピードで進んでいた。

にも関わらず竜宮城にはなかなか着かない。
まあ、私が寄り道してるからなんだけどね…

『桜花さん、いい加減ちゃんと進んでくださいよ~』

「えへ、いいじゃん、私泳げないから」こんな水の中に入ることないんだが!』

深海には見たこともない魚がいつぱいいた。
色とりどりの魚がそりらじゅうにいつぱい!

『えー? 桜花さんって泳げないんですか!?

「そうだよ!なんか悪い!?みんなに言われるよ!..」

『いえ、悪くは無いんですけど、桜花さんって運動神経良さそうないイメージがあつたんで』

「あ、でも水泳以外のスポーツとかは全部クラスで1番だよ」

『やつぱつあなたつしてす!』です…』

「やつかな?』

『すうじいですよ！水泳以外ねスポーツ全て1番とか……』

「アーニーソフィアはどうなの？運動」

『…………あ、あの魚綺麗ですよ』

「『まかしたっ』

『いいじゃないですか～、別に…』

「まあ、人（妖精？）にも得意不得意があるもんね！」

『そうです～！皆それぞれ得意不得意があるんですね～…』

「水泳が出来なくて何が悪い！～」

『運動が出来なくて何が悪い！～』

「そりだそりだ～！」

「『あはははっ』」

私達は2人で少し笑いあつた。

「それにしても、ここって、楽しい～！～」

『はあ、しょうがないですね、少しだけですよ』

「はあ～い

そして私はそこで魚を眺めていた。

『 もおーー、いい加減にしてくださいーーー。』

「 うわーーなーー? 急に、びっくりしたーーー。」

『 ここまで待たせる気ですか! いい加減行きますよーーー。』

「 えーーもうそんなにたつた? 」

『 はー、もうかれこれ数時間も』

「 うん、それじゃ行ひつか

『 やつと出発ですか…』

「 あはは…」

そして私達は水の中を進んでいった。

そして、微かにぼやける視界に眩しい光を放つ物が見えた。近づくにつれはっきり見えるその存在。

竜宮城がその姿を現した。

「 竜宮城つであれー? 」

『 はーー! あれです、氣を引き締めてくださいよーの先、なにがある

かわかりませから』

「分かつた、その楽譜を守る人?を倒して楽譜をゲットするんでしょ?」

確かにそんな感じに説明された気がする。

『確かにその通りですけど、倒すと同時に相手の心を救なわなければいけません』

「相手の、心?心をビリヤツで救うの?」

『戦う前に相手の心を自分が救うんだという事を証明するセリフを言わなければなりませんその言葉は『自分でお考えください。』

「相手の心を自分が救うんだという事を証明する言葉、分かつた考えとく』『お願いしますよでないと相手は死ぬ事になりますよ』

「相手の命までかかるてるのか、ならとことん頑張らなくちゃな、さすがに命はな」

相手が死ぬところなんて

喜んでみるほど私は鬼畜じゃない まっぴら御免だ。面倒だが致し方ない

『本当に願いしますよ』

「もへ、分かつたって」

『本当に分かつたんですか……?』

「大丈夫だつて」

(私つてそんなに信用ないかなー)

『はあ、とにかく、本つ当に頑張つてくださいよ。
わあ、そろそろ龍宮城に入りますよ』

ひつして私達は龍宮城に踏み込んだ。

いや、踏み込もうとしたが扉が重すぎて開かなかつた。

「もへ、どうやつて入るんだよ
『なにやつてるんですか？桜花さん、せつから私が開けよつとして
るのに』

「は？ どうやつて？」

『無論。』

《ガキヤゴキヤダーン！－！》

『強硬突破ですが』

「ソフティアつて運動苦手なんじや……」

『破壊系魔法の類いは大の得意ですよ。まあ、今やつきのは肉体強化の方が正しいかもしだせませんがね。』

『ちなみに、破壊系魔法はクラスで一番です。』

ウフフッ、そう微笑みながりソフィアはそう言ひはなつた。

「お見それ致しました。」

魔法ばんざい、私は心からそう思つた。

そうしてやつとのこつたで竜宮城の中に入れた。
プラスソフィアの以外な一面発見。

「…しても、何…？」の無駄な広間に無駄なあいだやか…。

『まあまあ、落ち着いてください』

「！」の建物の中に一軒家がいくつ入るの！？竜宮城だから周りにやたらと魚の肖像画とかあるし、こんなのに金使つ位ならもつとましな事に使える！！！」

『本つづ 当に落ち着いてください、周りの視線が痛いです。』

はつとして周りを見渡した、周りの人（魚？）が痛い人を見るような目で見ていた

『でも、仕方ないじやないですか』には乙姫様が住んでいて、それに、乙姫様の召使いも住んでいて、さらに一般の方もいるんですねから、ちなみにこの屋敷の面積は1000000……』

「言ひなああああああああ……氣が遠くなる……燃やしてやうが！」

『二年、やはり無理ですよ。だってこれは海の中ですから』

「んだがああああ！」

「もういいー！それより早く楽譜見つけに行こうー。」

「そうですね、そうしましょうか、とつあえず、奥に進んでみます

か?』

『ナリだね、ソリショウカ、ヨシ、レッシゴー!』

私達はとにかくそのばかでかい屋敷を走りまわった。

バーン!

「ルルかあ～～!」

ヒューワ

そこはただの物置部屋だった

「物置部屋かよ!」

『みたいですね』

「よし、次一次行!」――

〔数十分後〕

「はあはあ見つからねえよ!」

『おかしいですね、もひやんさん見つかるはずなんんですけど……』

「どうあえず、もう少し頑張ってください」

「う、~」

『でも、桜花さんが歩かずに走つて探すつて言つたんですよ？自業自得です！』

「う、う～」

正論を言われ私は全く反論が出来なかつた。

私はぶつぶつと文句を言しながら歩いた。

ドーンー。

歩いていると、目の前にほかの部屋とは比べ物にならないくらい豪華で大きい扉があつた

「もしかして、ここなんでしょう…」

『多分、ここなんでしょう…』

「もし物置部屋とかだったら私、マジでキレるよ?』

『大丈夫です。もしそうだつたら私もキレます。』

ギィー

私達はそのずつしりと重たい扉を開けた。

その先には狂つたように笑う綺麗な人（人魚？）がいた

「ここにちはは～？」

『あら、あなた達誰？見たことの無い顔だけど』

目の前には青い髪に青い瞳を持っていて、青と水色のフリルとレースをふんだんに使ったドレスを着た綺麗な人（人魚？）がいた。

「もしかして、あなたが乙姫様ですか？」

第8話（前書き）

とても短いです。

『ええ、そうだけど、何か御用かしら?』

『やつぱりこの人が番人です。覚悟は出来てますか?』

「うん、大丈夫」

『あなた達何をヒソヒソ話していらっしゃるの?それに、あなた方は誰なの?』

「ああ、すいません、私は人間界から精霊界を救うべく楽譜を求めてここにきました。貴方が持っている楽譜を私達にください。最終的には強行手段をとらせて貰うかも知れません。」

『あなた達、この楽譜の事を知つていらっしゃるの?』

「はい、お願いします楽譜を私達にください。」

『ふーん、この楽譜をねえ、… やあよこの楽譜は私に力をくれるのそんな便利な物はい、どうぞつて素直に渡す訳ないじゃない。』

「はあ、残念です。では、こちらも強行手段をとらせていただきます。」

大きく息を吸つて私は叫んだ

「哀れな彼女に魂の救済を…」

シャリシャリと歩くたびに沈む砂
見とおせぞ 先の見えぬ広大な大地に半ば呆れながら歩いていた

「だから暑いって！」

何よこの高温！死ぬわ！！

『まあ時期涼しくなりますつて』

「あり得んわ
嘘つくな」

『本当に砂漠の夜は氷点下ほど寒くなるんですよ』

10

私は言葉を失つた。

『あつ！桜花さん、前！！』

「え？」

そう言って、前を向いた瞬間、アリ地獄に落ちました。

『あああああ！桜花さん！！』

「たすけて！下！下になんかいる――――！」

『なんだ、ただの、アリ地獄ですね、でもただのアリ地獄じゃないですね、人食い虫ですね。』

「平然と言つなかつ……たすけるも……！」

『え？ なんか言つました？』

「すいません！ たすけてください……お願いします……！」

『しようがないですね』

そう言つてソフィアはふわっと飛び私をひっぱりあげてくれた。
その時、私は思った「ああ、ソフィアってそういうや妖精だったな……。」
と、ソフィアがすごい鬼畜だから忘れてた。

『桜花さん、今なんか失礼な事考えませんでした？』

「いえ、何も！ お助け頂きありがとうございました……！」

「（こいつ読心術でも使えるのかよ……）」

『……まあいいです。次から氣をつけてくださいね。』

『はあ～い。』

ソフィアの方からパキッ、ボキッ、という音が聞こえた。

「はい！ 以後氣をつけます！』

『あたりまえですーー』

その後は特になにもなく（暑くて倒れるかと思つたけど）無事に夜になつた。

「わいむー」

『だから廻歸いつたじゃないですか。夜は氷点下になりますよって』

「うへ、ぶえっくしゅー」

『きたなつー』

「わいひー」

『とつあえず、テント出しましたからわいむと入ってください』

これでやっと暖かくなると思つた私の期待はあつけなく散つた。

「テントの中も中でわいむー」

『まあ、布を鉄で支えてるだけですからね、しょうがないですよ』

「ソフイア～～なんとかしてえ～～凍え死ぬ～

『じょうがないですね、炎よ』

ソフィアがそう呟えた瞬間、近くにあつたランプのようなストーブのよくな物に火がついた。

「あつたけー」

『良かつたですね。あと、あしたにせパリ//シードに着く予定ですか
ら、なのであしたは朝が早いですからもつ寝ましょい。』

「うそ、ソフィア ありがと」

『どういたしまして。』

次の日の朝も曇も「暑い」だと「もつ嫌だ」だと「歩けない」
などと言しながらなんとかペリ//シードにたどり着いた

「ふつふつふつ 着いたぜ！ 私はやつたついにたどり着いたん
だ！」

『ええ。 そうですね』

「反応うすい！ てかこれペリ//シードだよなあ でかすぎねえか
『そうですね 私も正直ビックリしました』

そこには太陽に届きそうなくらいこの高さのペリ//シードが立ちはだか
つていた

「はいムリ無理むーりー！ トッペン行く前に
暑さに負け死ぬわ」

『別に トッペン行くなんて言つてませんよ。 だいたいフェイクで
すし 地下に在るんですよ』

「… つて どうちみち疲れるじゃん」

私達はペラリッシュの中に入った

第9話

「…………」

「ねえ、ソフィア？」

『はい、なんですか？まあ、頑張つてやつけてくださいね！…あと、呪い解くの忘れずにお願ひします…』

「いや…。えっと、ってかビーフやつて戦うん？」

『……。よくそんなこと知りずにあんな台詞強気で言えましたね…ある意味尊敬します…。まあ、とにかく、したい事をイメージしたらきつと出来ますよ』

「あ、そうなの意外と簡単そうだな。」

『才ホホホホ 馬鹿ね…！そんなのでこの最強な私に勝てるのかしら？秒殺してあげ……』

乙姫が喋っているにも関わらず私は攻撃を仕掛けてみた。（笑）

「バーンアウト」

一瞬にして炎が人魚に襲いかかった

『ギャアアアアー！おニユーの服があ…』

「よそ見してんなよ

「けつじつ簡単だぜ」

『もつ最悪ー』の楽譜の 恐ろしさを味わせてあげるわーー』

「いいぜ。かかるてきな」

『いいですよー桜花さんーー頑張れー』

「（ハハハ…あんたも戦えつひ）」

『なんか言いましたかあ？』

ソフィアがとてもとても黒い笑みを浮かべていらっしゃった。

「いえ、何も言つておつませんーー。」

『キーハーーイーー』

ドシャツー！

私達が相手を無視して喋つていいたらこきなり大量の水が、いや氷が
降ってきた。

「不意討ちー！しかも無暗唱ー？無いわあー！」

『あああああーーー服の恨み、消える消える消えりつまーー』

「たかだか服一枚でマジギレとかどんだけだよーー。」

『あああああーー私の新品种のヒョークーの服があーーー』

「はあ、厄介極まりないわね」

無言で視線をぶつける一人。勝利の女神はどちらに微笑むのだろうか…

・。*+*。・。*+*。・。*+*。・。*+*。・。*+*。

「はい…どうも主人公の桜花だぜ~い」

『同じくソフィアです。』

「『』まで読んでくださつてありがとうございます…！」『

「作者はもつともつと上手に書けるように頑張るので、暖かい目でみてくれるとうれしいぜ」

『これからも宜しくお願ひしますね。』

『にしても、乙姫様との戦いどちらが勝つんでしょう?』

「そんなの主人公である私が勝つに決まってるでしょ、主人公の特権よ、特権」

『分かりませんよ…作者は案外負けさせるかもしれないですから、主人公だからって何でもかんでも勝ちとか、人生そんなに甘く無いですよ』

「夢落ちとか?」

『死んでるかも知れませんね（笑）』

「うわ、ないわあ。鬼畜ソフティアめー。」

『なんとでも言え（黒い笑顔）』

「キャラ崩壊してんつて…? やめて、いやつ、やめてください…。
笑顔でナイフたくさん向けてくんの…。」

『一度お遊戯するか?』

お遊戯とかいてバトルと読むよ ソヨンソフティア

「やああああ…！」

「とまあ、桜花とソフィアのお喋りさままでにして、ここまで読
んで下さった皆様、本当にありがとうございます！ 作者はこれから
も精一杯頑張らせて頂きます！ これからもよろしくお願いします！
！」 b.y 黒椿

第10話（前書き）

祝
10話！

投稿遅れてしません(^-^)

第10話

『ウォーターアロー！』

「痛つ！くそつ、かすつた」

『ふふふ、楽譜のお陰で私の力は上がってるの』

「くそつ」

『あはははっ！私の服を燃やした罰よ…あ、まだまだ行くわ
よ』

「ライトシールドッ」

カキンッ カキンッ、カキンッ

『なんとか絶えたようね、けどその頃、いつまでもつかいら、ふ
ふふ』

「ソフティア！何かいい案無い！？」

『そうですね、あなたは近距離戦のほうが向いていますーどうにかしてあの矢を撃ち落とせないでしちゃうか？』

「撃ち落とす…そうだ！アドバイスありがと」

「ピストル」

私は銃を出した

『何？遠距離戦で戦うの？あたしに遠距離戦で挑もうだなんて、無謀もいいところだわ』

「誰が遠距離戦で戦うって言った？」

パリンシ

ついにシールドが壊れた

『シールドが壊れたんじゃ、あなたに勝ち目は無いわ！私の勝ちよ！…シールドを出そうとしたって無駄よあなたがシールドを作り出す前に私の矢があなたを貫くわ！…』

『とじめよーウォーターアローーー..』

「ふつ、シールドなんて今、私に必要無い！！」

『は？あなた何言ってるの？死を目の前にしてついに泣きちゃったかしら？』

私は銃で飛んでくる矢を撃ち落としながら確実に乙姫との距離を縮めていった

『なつ、そんな使い方するなんてつ、卑怯よ..』

「勝負に卑怯もくそもない！ソーダー！」

私は乙姫との距離がある程度縮まった所で剣を取り出した

『くつあなたがその気なら私だつて！』

そう言つて乙姫も剣を取り出した

カキンツ

カキンツ

ガツ

カキンツ

何度も剣と剣がぶつかる音がする

『わ、私が圧されてる？そんなバカな！』

「やつぱりね、確かに遠距離戦じゃあぬたに負けるかもしけないけど、多分あまり剣を握った事のないだろ？あんたになら……」

『あなただって剣を握った事などないでしょ！？』

「いや、私は小さい頃からよく剣を握ってたよ？」

『そんなつ』

ガキンツ

乙姫の剣が中をまう

「チヨックメイトだあ！』

『いや、いやあああああああああああああつ……』

ズパンツ

「ふー」

ガシャ

私は剣を下ろす

『わ、私、生きてる?』『へ、して……?』

「私の仕事は楽譜の回収とあなたの呪いをとく事、あなたを殺す意味は無い」

『で、でもあなたの剣がズパンツって何かを切る音がしたわ』

「ああ、あれはあなたの周りになんか黒色の変な帯が見えたからそれを切ったんだ、多分あれがあなたを狂わせてたんだと思つ」

『やつなの? ありがと!』

「別に、私はやらなくちゃいけない事をやつたまでだ で、楽譜、貰える?」

『ええ、あなたにはいろいろと助けて貰つたしね さあ、持つて行きなさい』

『サンキュウ』

『一つ目の楽譜ゲットですね!』

「うそ、じゃあ行くか、元氣でな姫」

『あなたもどうか元氣で、そうだしさを持つて行ってください』

シリ

「なんだい？」

『これは、かつてこの海、いえこの世界の全ての海を支配したとされている龍王と言われる者の鱗です。きっとあなたを守ってくれるでしょう。ネックレス型になつてるので首にかけとくとください』

「ふーん、そりなんだまありがと貰つとくよ、じゃあまた」

『ええ、こいつかこの屋敷に来てくださいこね』

「ああ、じやあまたなー」

私達はその屋敷をあとにした

『はあー、疲れましたねえ』

「そうだね、……つてソフィア向にもじてないじやん、観戦してただけじやん」

『……そんな事より、楽譜が手に入つて本つ当に良かつたですねつ』

「話逸らすなよ」

「はあ、で、次は2日後にあります。」

『次は砂漠です』

「は？ 砂漠？？」

『はい、砂漠です。』

「ええええええええええええ！」

『へ？ どうしたんですか？』

私は暑いのが大の苦手なのだ

「はあ～あ

『へ？ まあこいつが、次日指すはペラリッシュです……まあ、行きましょう！』

「う、～」

・。＊十＊。・。・。＊十＊。・。・。＊。・。・。＊
十＊。・。・。・。＊十＊。・。・。・。＊

「どうもー！ んこひはー！ あたは今晚はー桜花ですー！」

『ソフィアですー。』

『いやあー桜花さん、勝つちゃいましたね』

「あつたり前だろー主人公だからな！」

『負けければよかつたのに（笑）』

『いやいやいやいや、主人公負けたらお話し終わっちゃうって
いいじゃないですか、そうしたら私が主人公のお話しが始まりますから』

『ソフィアに主人公の座乗つ取られるー？』

『覚悟しといてくださいね』

『頑張るー・スッ、ゴク頑張るー！』

『そついえば次から新章始まりますね』

「新章、か…」

『なんですか、桜花さん哀愁なんか漂わせて』

『私、暑いの大嫌いなんだよね、だから夏なんて消えればいいのに』

『まあまあ、とうあえず今回はー』『今までーこれからもよひしくお願
いします！』

『ではまた、本編でー…』

第1-2話

「たしかに暑くはない、暑くはないよ、けどさ、けどやー・蒸し暑いよー・しかも道のつなげえーよー・蒸し暑い道のつなげえー・ライライする、ソフィアなんとかしてーー。」

『そんな事言われましても私にはビビリも出来ませんし出来ませんよ。まあ、私は魔法で涼しいんですけどね』

「ひきよつ、ああーもうーなんでこんなに蒸し暑いんだよー・私は蒸しまんじゅつかー!!」

『まあまあ、叫んだら余計に暑くなりますよ』

ガタツ

「あれ?今さつきなんか音しなかつた?」

『しましたね、なんでしょう?』

私達は辺りを見渡してみたがなにも異常が無かつたためそのまま歩きだした。

ポンポン

「もー、何? ソフィア」

『え？ 私、何もしてませんよ？』

「え？ でも今さっき私の肩叩いて…」

そう言いながら後ろを振り返るとそこにはにたりと笑つたミイラがいた。

「うわああああああああああ！」

させあああああああああつーー』

2人の叫び声は事前に打ち合わせでもしたのでは、というくらい見事に重なった

「逃げろ——つづく！」

『まつめ』

ミイラは何か笛らしき物を取りだし吹いた。すると、大量のミイラや骸骨らがやってきた。

私達はただただひたすら全力で逃げた
後ろから追いかけてくる＝
イラ達から

『桜花さん！…あそこの隙間に隠れましょー』

「う、うん！」

私達は角をまがり、すぐさまその隙間に隠れた

『くそつ、何処に消えた！？皆のもの全力で探せ！…侵入者をにがすなあ！…』

バタバタ

『ふー、なんとかやり過ごせましたね、それにしても、何だったんですね、今の』

「さあ、でも、何にしてももひ会いたくないな…」

『そうですね』

『見つけたぞ、あそこだー！…』

「うわあーん！もう嫌だあ～！」

私は走りながら叫んだ

『あ

目の前にミイラが現れた、左に逃げようとしたら左にもミイラが右を見たら骸骨が前後左右、ミイラ達に囲まれてしまった。

ジリジリと距離が縮まっていく

「どうしよう、ソフィア、なんかいい案ない?」

『こんな時こそ魔法です!』

「よし!バーンアウト!」

火の玉がミライに回がってどんどん行く

《シールド》

「なつ!?」

《魔封じ》

「よし!次こそ!バーンアウト!」

パスツ

「ソフィア、でないよ!ビリして!?」

『くそつ、魔封じか、厄介だな…』

「ソフィア、魔封じってな!?」

『一時的に魔法を使えなくする魔法です』

『そんなつ!…じゃあどうするの!?』

『今の私達には手も足も出せません』

「そんなつ

ミイラがこちらに縄を持ってやってきた。

私達は呆気なく捕まつた

「お久しぶりです！桜花ですっ！！」

『ソフィアです』

一にしても、捕まつたな

『捕まりましたね、まさかあんな下等生物に魔封じが使えるなんて、見くびつてました』

「あの、ソ、ソフィアさん？」

『ああ、すいませんいいですか、桜花さん、次回絶対にあの下等生物どもを足腰立たなくなるまでやつひやつてくださいあ、半殺しでもいいですよ』

「ひいい」

『いいですか、絶対ですよ、まあ、桜花さんが殺らなくて私が殺るんですけどね』

「ああああああーー私は何も聞いていないーー何も聞いていないーー
そう、私は何も聞いて無いんだーーはい、今回はここまでーー（汗）』

『絶対に殺すーー！』

「ひーいー

第1-3話

《『うるでおとなしくしていろんだ』》

——どうせ

「あーあ誰かやつのせいだ 捕まつちゃたじやない」

『わついわれましても』

「つたく 気味悪いぜ」

『それだけしか思つていない 貴方はある意味す』いですね

「お互い様だせ?」

『ふふつ』

周りには屍の山。頼りない蠅燭が辺りを照らしている薄暗い中で
いつ書かれたか解らないような浅黒い血でひび割れた?たすけて
の文字

耐えきれない者も居たのだろうか。縄で首を吊つているものも
見た。

まさに 地獄。

「じつかし よくもまあ、 私を『んなま』

スクツと立ち上ると
決心したよつに咳いた。

「…！」の艦 破壊する」

「肉体強化部分指定『足』」

両手をパキパキと鳴らしてから左足を前にだし、そのまま右足で中心部を思いつきり勢いよく蹴った。

「ｐａｓｅａｋ！…！」

ドカンッ

パラパラと欠片が落ちてくる中心部分にはぽつかりと大穴があいていた

『な、お前、どうやつてこんな大穴を…？』

「逃げるぞ…！」

『はい…』

私達は全力で逃げたがしかし、

「…ってソックローで追いつかれた…！」いつもどんだけ足速いんだよつ！」

『…転送…』

シュンッ

瞬間、私の周りはさつきと全く違う景気と化していた いや全くで

はない少し違ひへりじだ ペリリードの中はだいたいおんなじ柄だ

「ええええつ」

「ソフティアーー？これって『転送魔法』だよねー！？」

『はー、わつですかけど何か？』

「こやいやいや、何がそうですけど何か？、だ！！！使えんなひさつ
れと使えよー！無駄な体力使つたじゃねーかよー！…」

『だつて、転送魔法つて疲れますしぃ～体力も使いますしぃ～』

『ま、そんな事は置いといて、楽譜探しに行きまじょつ』

「いや、流すなよー謝れよー！…」

『五月蠅いー！だまれ！つべいべいべいあわせつけこへー！…』

「誰のせいでこんな事になつたと思つてんだよー！…」

『さあ、誰ですかねえー』

「お前だよーなんなんだよお前ーー！」

私達がいろいろと言い合つていると、田の前には砂で綺麗に固められた鋼鉄のような扉があった

『いの先から楽譜の気配がします』

「なんかこのパターンビツかでみたよつな…つてまさかこれも

『勿論』

『ガキヤ「ギャグ」』

『強行突破ですが?』

「再びおみそれいたしました」

「それじゃあ、2個目の楽譜も頂戴いたしますか!!--」

第14話

「つて、…え？」

『あら?』

その扉の先にはあると想つてこた楽譜はなく、もぬけのからだつた。

「なんか、このパターンもどつかで（涙）」

『いや、でも感じんんですよ、楽譜の配を、必ずこの近くにあるはずです。探しよつて…』

「えええええつーまた探すのーー?」

『何か文句でも?』

「だつて、竜宮城の時もあんなに走り回つたの?ーー?」

『あれは血脉筋骨です。あなたが勝手に走りだしたんだよつ』

「うう、ああ、うう」

『でも、この近くはあるのは確かなんですから、頑張つてください』

『わかつた、わかりました、やればいいんでしょ』

『やうです、やればいいんです。』

「ちえ」

私達はその部屋の中を探し回つた
もちろん、全力失踪でね！

「はあ／＼、見つからない／疲れた／」

『桜花さんはいい加減学習能力を身につけたほうがいいですよ』

そんなことを言いながら壁にもたれ掛けた瞬間

力チツ

二〇〇〇年

カバツ

私達が今さっきまで立っていた床は真っ二つに割れ、私達の身体は結構速い速度で落ちていった

「うわああああああつつ～～！！」

『 もやあああああつつ～～！～』

「ソフイアー」とつあえず地面にぶつかるまでに何とかしてえええええ～～！！！」

『ええー！？』、『ええー！？』

「と、とつあえず、なんかクッショニ的な物出してええ————！」

『わ、わかりましたあああ——』

「早く早くつ——もう地面があーー！」

『ええつと、』、極太ふかふかマットー』

「そんなんでいいの！？』

ボン！

その名のまま、極太のふかふかそうなマットが田の前に出現した。

ボフウンッ

「ブハア、せ、セーフ」

『な、何とか間に合いました』

「落卜中、マジで死ぬかと思つた……」

『私もです』

「魔法つて、本つ当に便利、魔法無かつたら確実に私達死んでた」

『私も、普段何氣無く魔法使つてたから忘れてましたたけど、魔法つて本当に、スッゴク便利な物だつたんですね』

「魔法に大・感・謝ああ——！」

『やめてください、いぬかいですよみつともない』

「なん？」

四
二

「とつあえず！」から降りようぜ～」

『そうですね、じゃ、飛び降りましょう』

「えー!? これ消さないの?」

『はい、これは時間が経つたら消えます』

ふん、いや、飛ひ降りるか？

۱۰۰۰۰۰

見事着地！ と思ひき甘

渭寧ノニノノノ崩し

ベシヤツ

転倒。

「いつた」

『何してるんですか』

「しょうがないじゃん真っ暗で何にも見えないんだから」

『まあ、確かにそうですが』

そう、そこは真っ暗闇だった
一寸先は闇とはこのことだらう

「なあ、ソフィア？これでどうしろって言つのや。降りたはいいが
闇一色で何も見えないじゃないの」

『シイツ！何が来るかわかりませんよー！油断は禁物ですって』

「へえ～そ～なのかあ～」

『炎よー！の忌まわしき娘を焼き払えー！』

「はあー？ちょっと可笑しいだろー！…事実を述べただけじゃん。何
なんだよー！」

『はあーー、なんで女王様はこんな人をお選びになられたのでしょうか。私にはわかりません』

「仕方ないでしょ。あんただつて最初は　いじで会つたが何かの縁
つてさんざん言つてたじやない。」

『まあくな。醜いや』

『え』

明らかに最初の頃と扱かわれ方が違つゝ氣がする。
これはひどいわ

何て言つてる間が？油断 な訳で。

『ブオオオオオ！』

瞬時に砂嵐が巻き上がり、自分たち田掛けて飛んできた。

「『変なの来たー』」

危機一髪すれすれで避けてああ、私なんか格好良くね！？なんて思
いながらソフィアに目配せした。

ソフィアは私の心をよんだのか変な人を見るような田でこいつを見
ていた

私はそれを見なかつた事にしてその変な物体の方に向きかえつた

「ええと、取り敢えずどちら様ですか？」

『オマエラ ジヤマ ケス』

「はあ、やつぱりな

第15話

「はあっ、めんじにから余計な戦いは避けよつと想つてたの。」
ダルいつたらありやしないわ

『グルワアアアツー』

地響きのあと、こきなり地面がひび割れた。

それを軽々しく飛んで避けるとチックと叩打かしてから宙に浮かんだ

『ビリビのボ モンみたいな鳴き声ね…』

『まあ、いいからひとつやつせんべいを貰へることよ』

『楽譜の為なら何でも有りなのかな』

『前にも言いましたけど、私的には楽譜と私自身が無事だったら後
はどうでもここですか』

『あいかわらず鬼畜だね』

『なんどでも』

『邪魔者 ケス』

鉄の釘があちこち空中から私に向かつてきた

「まあ、意外と、」

ガシャガシャン！－

「私一人で十分かもね」

キシャンッ！

私は炎を纏つた刃で空中をきつた。

『なかなかですね…。鉄釘を炎の刃で全て叩き斬るなんて。綺麗でしたよ』

「本当ならドヤ顔のひとつでもするんだがな。まあ、前より上手くなつたかも」

あと武器ぐらいうら無暗唱もいけるな。私つてば才能はあるわあって心を騙さないとやつていけないくらい、危険なことなのだからわかつていた事だが。

「いつからもいくけど？まあ、そっちから仕掛けてきたんだし。」

命乞いなんて無しだよ？

そうやつて笑つた顔はきっと恐ろしかつたに違いない。

あ、格好つけました。すみません。

そつじて私は勢いよくそいつに斬りかかつた

けど

ガキンッ

「斬れない！？」

『オマエラ ジャマ ケス』

『桜花さん、斬れないのなら諦めましょう、呪文です！使えるでしょ？』

「わかった！」

「ものみな焼き尽くす浄化の炎、破壊の主にして再生の火我が手に宿りて敵を喰らえ紅き炎『紅蓮炎』！」

私がそう唱えた瞬間、真っ赤に燃え盛る炎が相手にめがけて飛んで行った

ジュウウ

相手の鎧はしきものが少し溶けた

『いの調子です、頑張ってくださいー。』

「よつしゃあー！」

再び呪文を唱える

「見るもの全てを魅了する紅き焰偽りを灰とかせ『真炎華』！」

そう唱えた瞬間大きな花びらのような炎が相手に容赦なく降りかかる鎧が音をたてて少しづつ溶けていく

「よつしゃー次の呪文を…」

『桜花さん後ろつづ…!…!…!』

「えつ？」

ソフィアの切羽詰まつた声が聞こえ、振り向いた時にはもう遅かった

相手が唱えただろう呪文で発動された「ゴウゴウ」と燃え盛る火の玉が私のすぐ近くに迫っていた

動くことすらできなかつた

その時私は死を覚悟した

・。 * + * . 。 * + * . 。 * . 。 *

+ * . 。 * . 。 * + * . 。 * . 。 *

「眞さんお久しごりです！桜花です！」

『ソフィアです！』

「ねえ、ソフィア」

『なんですか？』

「私さ、本編で死にそうだけど大丈夫かな？」

『大丈夫なんじゃないですか?』

「なんでそういうきれるの」

『だつて、桜花さんはい・ち・お・うー主人公なんですから』

「私がこんなに焦つてるのになんてやつ……でもまあ確かに私主人公だから死にはしないよね」

『死にはしなくても大怪我はするかもしだせんけどねー』

「ぐつ、…ま、まあなんとかなるよー……きっと」

「そうだ!ソフィア、たすけ…」

『いやです』

「せめて最後まで言わせて……！」

『いやです、私は桜花さんに私に話しかける権利を与えた覚えはありません』

「えー、いーじゃん!」

『ダメです』

「いーじゃん!..」

『つむさいです、少し黙つててください でもまあそんなに大声だす元氣があるなら本編、大丈夫ですよ』

「は？」

・。＊＋＊。・。・。＊＋＊。・。・。＊。・。・。＊

ソフィアはソフィアなりに桜花を元気付けようとしたのかもしりませんね！

本編での桜花の運命はいったい！？

桜花がどうなるか、続きを楽しみに待っていてください！

dy黒椿

第16話

しかし、待つても一向に衝撃がやってこない私は恐る恐る田を開けてみた田の前には鱗のような盾が私の身を守ってくれていた

「ソ、ソフィア？」

『私ではありません』

ソフィアは首を左右にふった

「じゃあ、一体だれが…」

(竜王と言われる者の鱗です。きっとあなたを守ってくれるでしょう)

私はすぐさま胸元を見おろした。しかし、そこには今まであったはずの鱗のネックレスは無かつた

「やっぱり

その鱗のような盾は前に行つた竜宮城で乙姫から貰つた竜王の鱗だつたのだ

「乙姫に感謝しなくっちゃな

「今度こそ、お前に死を見せてやるよ」

《オマヒラ ジャマ ケス ガクフハ ワタサナイ》

「それでも、お前を倒して楽譜をもらわなくっちゃ いけないんだよ」

「ソフィア、こいつって感情とかつてあんの？」

『いえ、そいつは楽譜を守る想だけにこじらぬので感情などはないません』

「じゃあ、倒してもいいんだな？」

『はい、構いませんよ』

「…」

『オマエラジヤマケス』

「へんつ、やれるもんなうやつてみろー。」

そいつはまた火の玉をとばしてきた

「そんなの、もつ当たるわけないだろ！」

「こちからも行かせて貰つよ。」

「闇夜を切り裂く白雷の光
敵を碎き塵とかせ『十字架閃光』」

辺りが暗くなり十字架型の白雷が相手を突き刺した

ピカツ

ドーンツツ

鼓膜が破れるんじゃないかといつぶらに大きな音が響き渡った

「つ、」

「あ、相手はー?」

グラ

ガツツシャーンツツツ

そいつは煙をたてながら先ほどまではいかないが結構派手な音をたてて倒れた

「勝つたのかな?」

『多分…』

私達はそいつに近づいてみた
しかし、そいつはピクリとも動かなかつた

『やつましたね! 勝つたんですよ…』

『でもさ、楽譜ついでにあんの?』

『確かに、ビリにあるとしようね、みた限りビリともないのですが

「」の部屋には私とソフィアと倒したこいつだけ、案外こいつ中に
あつたりして

『さすがにそれはないでしょ!』

「いやいや案外あるかもよ」

『じゃあ、やるだけやつてみますか』

「我が道を阻むものに大穴を開けよ『炎火大車輪』」

そう呴えると少し大きめの火車がそいつの鎧にどんどん穴を開けてゆく

そして、数分後やつと開いた

「……あつたよ、あつちやつたよ、樂譜…」

『本当にありましたね、じゃあちやつちやと貰つて次行きましょう!』

「わかつた」

私はその楽譜を一生懸命引っ張つたがなかなかこれない

「無理、とれん!」

『なら、肉体強化使えばいいじゃないですか』

「たしかに、肉体強化部分指定『腕』」

「よし」

そして私は改めて楽譜に手をかけて引っ張つた

ガキンツ

楽譜は外れた

「やつたあーーー！」

『やりましたね、桜花さん！ついに二つ目の楽譜ゲットですよーーー！』

喜びに浸っているのもつかのま

『爆弾のストップバーが外れたため、只今から10秒後に爆発いたします』

「『え？』」

『10秒前』

『9』

「二、逃げろー！」

『8』

『ああああああーーーー！』

『7』

私達は全力で走った

『6』

「ソフティアビリティの...?」

『5』

「『』のままじや間に合わなこと...」

『4』

『』じやあむつて言われても

『3』

「『』のまま死ぬのはいやだあ——」

『2』

『』あたりまえです！

『1』

『』せつだ、桜花さん止まって...』

「え？」

『0』

力チツ

ドツツツツガー——ンツツツツツ

バラバラとペリハッシュードの欠片が宙を舞つ

ピシッピシッピシ

パリンシ

『はー、間に合って良かった』

私達は何とかソフィアのシールドで持ちこたえた

「てゆうか、ペリハッシュード跡形もなく粉々になつたけどこいつ?」

『いいんですかね?』

『いや、疑問を疑問でかえされても…』

『まあ、楽譜の為の犠牲つてことで許してもらいましょう』

『はたしてそれで通用するのだろうか』

『まあ、何とかなりますつて』

『…まあいつか』

『にしても、今回の楽譜ゲットへの道のりは険しかつたですね』

「確かに、死にそうにもなつたしね…」

『あはは…まあ生きてるからいいじゃないですか』

「死んだらシャレになんねーよ」

『桜花さんは仮にも主人公なんで死なれたら困りますもんね。『仮にも』ですか』

「そんなに仮にもを主張しなくつても」

『本当、私的には楽譜と自分が無事だったらいいんですけどね』

「せつとき私を守つたくせに…」

『だつて、あなたが死んでしまつたら女王様に怒られてしまつじやないですか』

「へへわあ、きつちつべー」

『なんとでも言え（黒い笑顔）』

「で、次の楽譜のありかは？」

『えーっと、確か次は天界だつたと思ひます』

「天界！？」

『天界ですけど、どうかしたんですか？』

「いや、スッゲー楽しみだなと」

『天界は結構観光地として有名なんですよ』

「天界行つたら遊んでいい！？」

『私も行つてみたい所とかあるんでいいですよ』

「やつつたあ～～」

『楽しみですね！』

「うん……」

私達は天界を楽しみにし、その場を後にした

・。 * + * . . . * + * . . . * . . . *

+ * * + * * . . . *

「こんなにちは！桜花でっす！」

『ソフィアです どうか今回もお付き合い願います』

「にしても、本編で死ななくて良かつたー！マジで死ぬかと思つた
よー！」

『おとなしく死んでくれば良かつたのに』

「死ねば良かつただなんてソフィアひどい…今までのは遊びだつた
のね！」

『1人で変な子芝居しないでください読者の方々が誤解したりどうするんですか』

「まあ、その時はその時でどうとかするよ」

『なんですかそれ…』

「次いく天界の名物つてなんなの？」

『名前は言いませんが桜花さんや読者の方々に結構親しみのあると思われる食べ物です』

「なにそれ…？スッゲー気になる…お願い…ソフィア教えて！」

『ダメです、次の楽しみです』

「ちえー、ソフィアのけち」

『けちりで結構です』

「とまあ、今回さ」「今まで…また次回よろしくお願いいたしますー。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5407x/>

~楽譜~私の異世界探検ライフ

2012年1月14日15時47分発行